参考資料

1　水戸市の文化財一覧

国指定文化財（18件）

種　別	名　称	所在地	管理・所有者	指定年月日
重要文化財（建造物）	八幡宮本殿	八幡町	八幡宮	昭29.　9. 17
	旧弘道館（正庁・至善堂・正門附塀）	三の丸	茨城県	昭39.　5. 26
	薬王院本堂	元吉田町	薬王院	昭41.　6. 11
	中崎家住宅	鯉淵町	個人蔵	昭43.　4. 25
	佛性寺本堂（附旧露盤１個）	栗崎町	佛性寺	昭63.　1. 13
重要文化財（美術工芸品）	木造聖徳太子立像	酒門町	善重寺	大　4.　8. 10
	太刀（銘則包作・附糸巻太刀拵）	宮町	東照宮	明44.　4. 17
	朱漆足付盥	六反田町	六地蔵寺	平　3.　6. 21
重要無形文化財	一中節	保持者が水戸市に在住	一中節保存会	平　5.　4. 15
	一中節三味線	千波町	東　峰子（いわゆる人間国宝）	平13.　7. 12
特別史跡	旧弘道館	三の丸	茨城県	昭27.　3. 29
史　跡	常磐公園	常磐町・見川町	茨城県	大11.　3.　8
	吉田古墳	元吉田町	水戸市	大11.　3.　8
	愛宕山古墳	愛宕町	水戸市・愛宕神社	昭　9.　5.　1
	大串貝塚	塩崎町	水戸市	昭45.　5. 11
	台渡里官衙遺跡群（台渡里官衙遺跡・台渡里廃寺跡）	渡里町	水戸市	平17.　7. 14
名　勝	常磐公園	常磐町・見川町	茨城県	大11.　3.　8
天然記念物	白旗山八幡宮のオハツキイチョウ	八幡町	八幡宮	昭　4.　4.　2

記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財（国選択）

無形の民俗文化財	大串のささらと大野のみろく	大串町・下大野町	大串ささら保存会 大野みろくばやし保存会	昭48. 11.　5

県指定文化財（68件）

区分	種　別	名　称	所在地	管理・所有者	指定年月日
有形文化財	建造物	水海道小学校本館	緑町	茨城県立歴史館	昭33.　3. 12
		薬王院仁王門	元吉田町	薬王院	昭34.　5. 22
		旧茂木家住宅	緑町	茨城県立歴史館	昭45.　5. 28
		六地蔵寺四脚門	六反田町	六地蔵寺	昭46. 12.　2
		旧水戸城薬医門	三の丸	茨城県教育委員会	昭58.　3. 18
		綿引家住宅主屋・倉	元吉田町	個人蔵	平　3.　1. 25
	絵　画	絹本著色　弁財天画像	緑町	茨城県立歴史館	昭39.　7. 31
		絹本著色　両界曼荼羅	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　弘法大師像	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　真言八祖像	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　十二天立像	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　六字経曼荼羅	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　十三仏図	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本著色　釈迦十六善神図	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		紙本著色　制吒迦童子像	六反田町	六地蔵寺	昭50.　3. 25
		絹本墨画　芦雁図　立原杏所筆	本町	個人蔵	平14.　1. 25
		絹本著色　流燈　横山大観筆	千波町	茨城県近代美術館	平16.　1.　8
		カルピスの包み紙のある静物 中村彝筆　油絵　麻布　1923年	千波町	茨城県近代美術館	平18. 11. 16
		紙本淡彩　海島秋来　小川芋銭筆	千波町	茨城県近代美術館	平22. 11. 18
		絹本著色　阿房劫火　木村武山筆	千波町	茨城県近代美術館	平22. 11. 18
	彫　刻	鍍金仏	緑町	信願寺	昭29.　8. 18
		阿弥陀如来像	緑町	茨城県立歴史館	昭30.　1. 25
		木造　薬師如来坐像	元吉田町	薬王院	昭34.　5. 22
		木造　釈迦如来坐像	飯島町	福性院	昭35. 12. 13
		銅造　大黒天像	河和田町	報仏寺	昭37. 10. 24
		金銅化仏（銅造　文殊菩薩坐像）	泉町	個人蔵	昭44.　3. 20
		木造　阿弥陀如来脇侍三尊像	緑町	茨城県立歴史館	昭47. 12. 18
		木造　十二神将像	元吉田町	薬王院	昭49. 11. 25
		銅造　大日如来及三十日仏坐像	栗崎町	佛性寺	平12. 11. 27
	工芸品	黒韋肩浅葱筋兜	八幡町	個人蔵	昭32.　6. 26
		蒔絵櫃	西原	山崎氏	昭33.　3. 12
		つのたらい	緑町	茨城県立歴史館	昭33.　7. 23

有形文化財	工芸品	六地蔵石幢	緑町	茨城県立歴史館	昭37. 10. 24
		鎧(兜, 大袖付)	東台	個人蔵	昭37. 10. 24
		鎧(兜, 大袖付)	泉町	個人蔵	昭37. 10. 24
		鐙	緑町	茨城県立歴史館	昭37. 10. 24
		鞍	五軒町	個人蔵	昭37. 10. 24
		大薙刀	宮町	東照宮	昭37. 10. 24
		銅製経筒	天王町	神崎寺	昭37. 10. 24
		鐙	五軒町	島村氏	昭38. 8. 23
		太刀(銘吉房)	宮町	東照宮	昭38. 8. 23
		大袖鎧	泉町	個人蔵	昭39. 7. 31
		鐙	泉町	個人蔵	昭39. 7. 31
		金梨地蒔絵鞍	緑町	茨城県立歴史館	昭41. 3. 7
		灌頂用具	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		密教法具	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		銅装龍輪宝羯磨文戒体箱	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		銅装龍輪宝羯磨文説相箱	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		銅板貼山伏笈	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		漆塗経櫃	六反田町	六地蔵寺	昭50. 3. 25
		総毛引紅糸威胴丸具足	宮町	東照宮	平10. 1. 21
		鰐口 如意寺, 嘉暦三年在銘	緑町	茨城県立歴史館	平16. 1. 8
	書 跡	大般若波羅密多経	堀町	個人蔵	昭38. 8. 23
		唐本一切経(跋藤原時朝)	西原	個人蔵	昭42. 11. 24
		六地蔵寺所蔵典籍・文書	六反田町	六地蔵寺	昭46. 3. 29
		紙本墨書 神皇正統記 六地蔵寺本	六反田町	六地蔵寺	平16. 1. 8
	考古資料	銅印	緑町	茨城県立歴史館	平 4. 1. 24
		海後遺跡出土人面付土器	緑町	茨城県立歴史館	平14. 12. 25
		三昧塚古墳出土遺物	緑町	茨城県立歴史館	平16. 1. 8
		小野天神前遺跡出土	緑町	茨城県立歴史館	平16. 11. 25
	歴史資料	訂正常陸国風土記版木	緑町	茨城県立歴史館	昭60. 12. 16
		徳川光圀書翰集	三の丸	茨城県立図書館	平23. 11. 17
民俗文化財	無形の民俗文化財	大串のささらばやし	大串町	大串ささら保存会	昭41. 3. 7
		大野のみろくばやし	下大野町	大野みろくばやし保存会	昭41. 3. 7
		水戸大神楽	元山町 常磐町	柳貴家正楽社中 柳貴家勝蔵社中	平 3. 1. 25 平20. 11. 17

記念物	史　跡	笠原水道	千波町・笠原町・本町・元吉田町	水戸市	昭13.　3. 11
		台渡里廃寺跡	渡里町	水戸市	昭20.　7. 16
		水戸城跡（塁及び濠）	三の丸	茨城県・茨城大学・水戸市	昭42. 11. 24

市指定文化財（94件）

区分	種　別	名　称	所在地	管理・所有者	指定年月日
有形文化財	建造物	杉崎八幡神社本殿	杉崎町	杉崎区	昭57.　7.　1
		中原不動尊本堂及び厨子	中原町	中原区	昭61.　4.　1
		東光寺薬師堂及び厨子	大場町	東光寺	平 2.　3.　2
		六地蔵寺本堂（地蔵堂）	六反田町	六地蔵寺	平 2.　3.　2
		六地蔵寺法寶蔵	六反田町	六地蔵寺	平 2.　3.　2
		和光院不動堂	田島町	和光院	平 9.　9.　1
		八幡宮拝殿及び幣殿	八幡町	八幡宮	平 9. 11.　7
		八幡宮神楽殿	八幡町	八幡宮	平 9. 11.　7
		八幡宮随神門	八幡町	八幡宮	平 9. 11.　7
		薬王院四脚門	元吉田町	薬王院	平17.　3. 10
		春日神社本殿	赤尾関町	春日神社	平25.　2.　8
	絵　画	三十六歌仙扁額	宮町	東照宮	平 5.　4. 14
		紙本著色　不動明王像	田島町	和光院	平 6.　2.　1
		絹本著色　那珂湊口晩望図　立原杏所筆	緑町	個人蔵	平19.　5.　9
		絹本著色　雪中小禽・柳下水禽図　立原杏所筆	大町	水戸市	平19.　5.　9
		絹本著色　旭日波図　狩野興也筆	大町	水戸市	平22.　2. 18
		絹本水彩　晃嶺群芳之図　五百城文哉筆	大町	水戸市	平22.　2. 18
		絹本著色　聖徳太子絵伝（断簡）	酒門町	善重寺	平23. 10. 28
		絹本著色　阿弥陀如来来迎図	酒門町	善重寺	平23. 10. 28
	彫　刻	銅造　阿弥陀如来及両脇侍立像	八幡町	祇園寺	昭31. 12. 17
		木造　阿弥陀如来立像	吉沼町	吉沼観音堂保存会	昭37.　2. 24
		木造　十一面観音立像	飯富町	個人蔵	昭47. 11. 28

有形文化財	彫　刻	木造　薬師如来坐像	大場町	東光寺	昭56.　3.　9
		十一面観音像	鯉淵町	個人蔵	昭56. 10.　1
		石造　六地蔵	栗崎町	佛性寺	昭60.　3. 25
		石造　金剛力士立像	栗崎町	佛性寺	昭60.　6.　1
		銅造　阿弥陀如来立像	飯富町	真仏寺	平　5.　4. 14
		木造　金剛力士立像	元吉田町	薬王院	平　6.　6.　3
		木造　神事面	元山町	別雷皇太神	平　8. 11. 15
		木造　阿弥陀如来及両脇侍立像	酒門町	定善寺	平16.　2.　6
		木造狛犬	八幡町	八幡宮	平21.　2.　6
		木造菩薩立像	元吉田町	薬王院	平23. 10. 28
	工芸品	常葉山時鐘	宮町	東照宮	昭28.　9. 10
		太極砲	常磐町	常磐神社	昭37.　2. 24
		陣太鼓	常磐町	常磐神社	昭37.　2. 24
		備人形	新荘	個人蔵	昭47.　5. 19
		五輪塔	元吉田町	薬王院	昭48.　1. 20
		刀（市毛徳鄰作）	袴塚	個人蔵	昭40.　6. 22
		刀（徳川斉昭作）	三の丸	鹿島神社	昭40.　6. 22
		刀（直江助政作）	宮町	個人蔵	昭40.　6. 22
		刀（直江助政作）	袴塚	個人蔵	平　8.　2. 23
		刀（勝村徳勝作）	袴塚	個人蔵	平　8.　2. 23
		安神車	宮町	東照宮	昭42.　3. 22
		銅造燈籠	宮町	東照宮	昭54.　8.　3
		銅造釣燈籠	宮町	東照宮	昭54.　8.　3
		陣太鼓附台車	八幡町	八幡宮	昭54.　8.　3
		須恵器壷	塩崎町	水戸市	昭57.　2. 22
		石造宝篋印塔	大串町	水戸市	昭59.　3. 30
		大串稲荷神社神輿並びに日月鉾	大串町	大串稲荷神社	平　4.　2.　5
		黒漆金銅装八角神輿，台輪付き（附　瓔珞・風鐸・神鏡等装飾金具，案2脚，銘札2枚）	八幡町	八幡宮	平21.　2.　6
		七面焼土瓶（蓋付）・土鍋	見川	個人蔵	平22.　2. 18
	典　籍	左近詠草	城東	個人蔵	昭59.　3.　7
		傳燈山和光院過去帳	田島町	和光院	平22.　2. 18
	古文書	紙本墨書　足利氏満感状	備前町	個人蔵	平21.　2.　6
	考古資料	石枕・立花	内原町	水戸市	昭56. 10.　1

有形文化財	考古資料	埴輪武装男子	塩崎町	水戸市	平 8. 11. 15
		三角縁神獣鏡残欠	大場町	個人蔵	平13. 8. 31
		大串貝塚出土遺物	塩崎町	水戸市	平18. 4. 18
		大串遺跡第四号住居跡出土遺物	塩崎町	水戸市	平18. 4. 18
		台渡里官衙遺跡出土銅印	塩崎町	個人蔵	平23. 10. 28
		台渡里廃寺跡南方地区第1号工房跡出土資料	塩崎町	水戸市	平23. 10. 28
	歴史資料	算額	大場町	東光寺	昭59. 3. 30
		板碑	六反田町	六地蔵寺	昭60. 6. 1
		板碑	平戸町	個人蔵	昭60. 6. 1
		五輪塔	千波町	個人蔵	平14. 4. 5
		日新塾棟札	大町	日新塾精神顕揚会	平22. 2. 18
		石河明善日記附学制略1部，弘道館教育に関する意見書1部	大町	水戸市	平23. 10. 28
		獨杯集	塩崎町	個人蔵	平25. 2. 8
		加倉井砂山夫妻の墓	成沢町	個人蔵	平25. 2. 8
無形文化財		水府流水術	城東	水府流水術協会	平 6. 6. 3
		田谷の棒術	田谷町	田谷の棒術保存会	平23. 10. 28
		北辰一刀流	北見町	水戸東武館古武道保存会	平25. 2. 8
民俗文化財	無形民俗文化財	水戸の獅子舞	浜田町	個人蔵	昭45. 4. 17
		大根むき花	元石川町	大根むき花保存会	昭50. 6. 19
		有賀神社の磯渡御	有賀町	個人蔵	昭59. 5. 1
記念物	史 跡	義公生誕の地	三の丸	常磐神社	昭28. 9. 10
		藤田東湖生誕の地	梅香	水戸市	昭28. 9. 10
		常磐共有墓地	松本町	常磐共有墓地管理委員会	昭29. 7. 10
		水戸殉難志士の墓	松本町	水戸殉難志士の墓保存会	昭29. 7. 10
		会沢正志斎の墓	千波町	本法寺	昭29. 7. 10
		武田耕雲斎の墓	見川町	妙雲寺	昭29. 7. 10
		酒門共有墓地	酒門町	酒門共有墓地管理委員会	昭30. 7. 23
		千束原追鳥狩本陣跡	元石川町	常磐神社	昭54. 8. 3
		日新塾跡	成沢町	日新塾精神顕揚会	平21. 2. 6

記念物	史　跡	横山大観生誕の地	城東	水戸市	平22.　2. 18
		唯円道場跡伝承地	河和田町	報佛寺	平23.　3.　7
	天然記念物	光藻	備前町	水戸市	昭28.　9. 10
		かたくりの里	有賀町	有賀北区	昭56. 10.　1
		六地蔵寺のスギ	六反田町	六地蔵寺	昭58.　3. 16
		六地蔵寺のイチョウ	六反田町	六地蔵寺	昭58.　3. 16
		六地蔵寺のシダレザクラ	六反田町	六地蔵寺	昭60.　6.　1
		愛宕山古墳のコブシ	栗崎町	個人蔵	昭61.　3. 25
		和光院の大椎	田島町	和光院	平　6.　2.　1
		水戸城跡の大シイ	三の丸	水戸市	平10.　8.　5

【登録有形文化財】

種　別	名　称	数量	所在地	管理者	登録年月日
建造物	茨城県立水戸商業高等学校旧本館玄関	1	新荘	茨城県	平　8. 12. 20
	水戸市水道低区配水塔	1	北見町	水戸市	平　8. 12. 20

※「所在地」については町名で，「管理者」については個人所有の場合「個人蔵」と表示した。

２　地域区分ごとの歴史的資産

①　地域区分とその構造

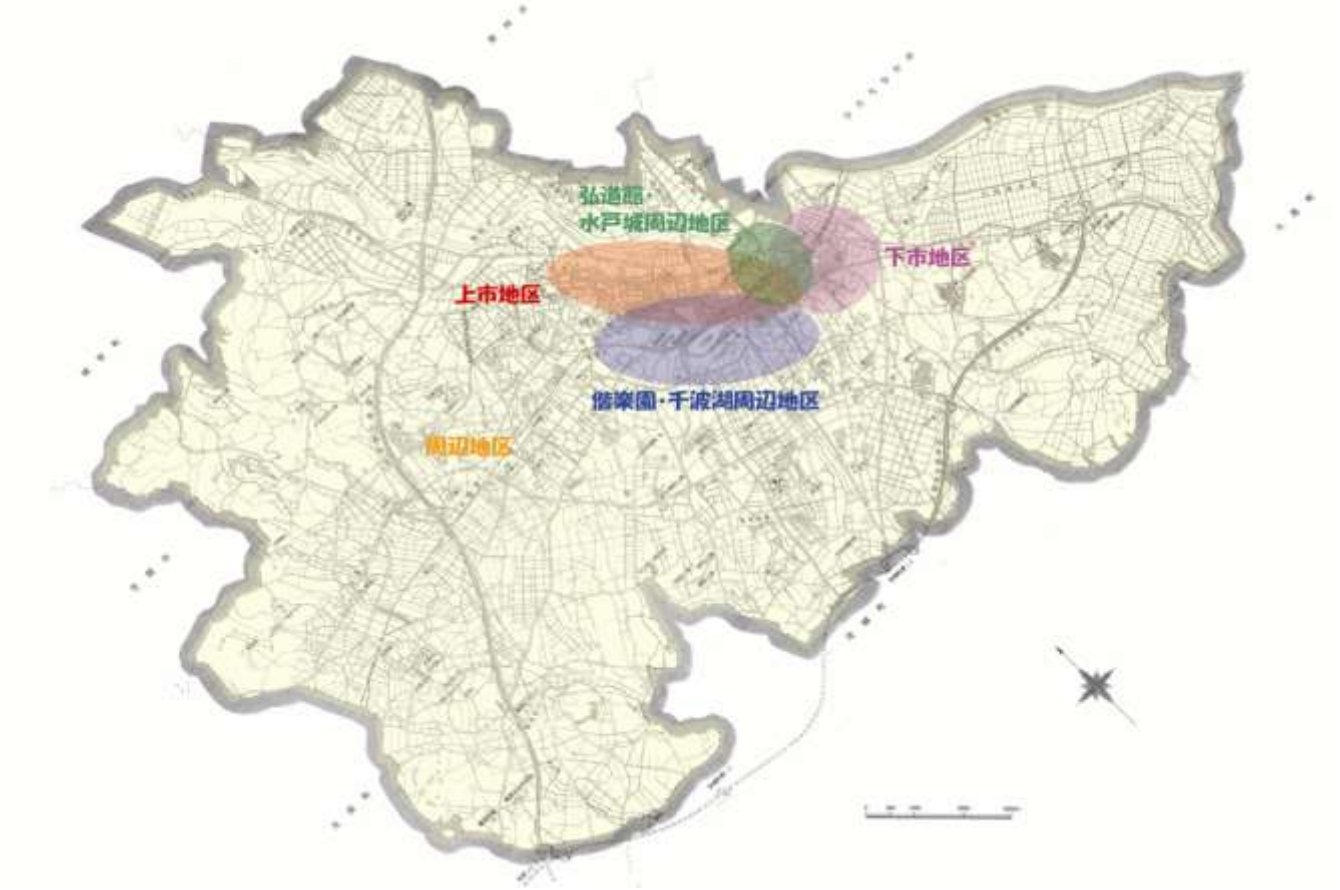
本市の市街地形成上の特色は，江戸時代，水戸城を中心に城の西側の馬の背状の台地に形成された「上市（うわいち）」と，城の東側の低地に形成された「下市（しもいち）」の双子町として発展してきたことにある。

さらに，９代藩主斉昭の時代，水戸城三の丸に修業の場である「弘道館」，千波湖北西岸の台地に休息の場である「偕楽園」という，我が国を代表する一対の教育・文化施設が創設され，今日も本市の都市景観の核として存在し続けていることである。

また，旧城下町を取り巻く「周辺地区」は，現在，都市化の進展により市街化が進んでいるが，かつては城下町と密接に関わる近郊農村として成立・発展してきた経緯がある。

このように，水戸城及びその城下町は，「弘道館」－「偕楽園」，「上市」－「下市」という対称的な構造をなしており，これをかつての近郊農村である「周辺地区」が取り巻くという空間構成をなしている。

したがって，ここでは本市の歴史的資産を抽出するための作業として，「弘道館・水戸城跡周辺」，「偕楽園・千波湖周辺」，「上市地区」，「下市地区」，「周辺地区」の５つに地域区分を行いその分布状況の整理を行うこととする。



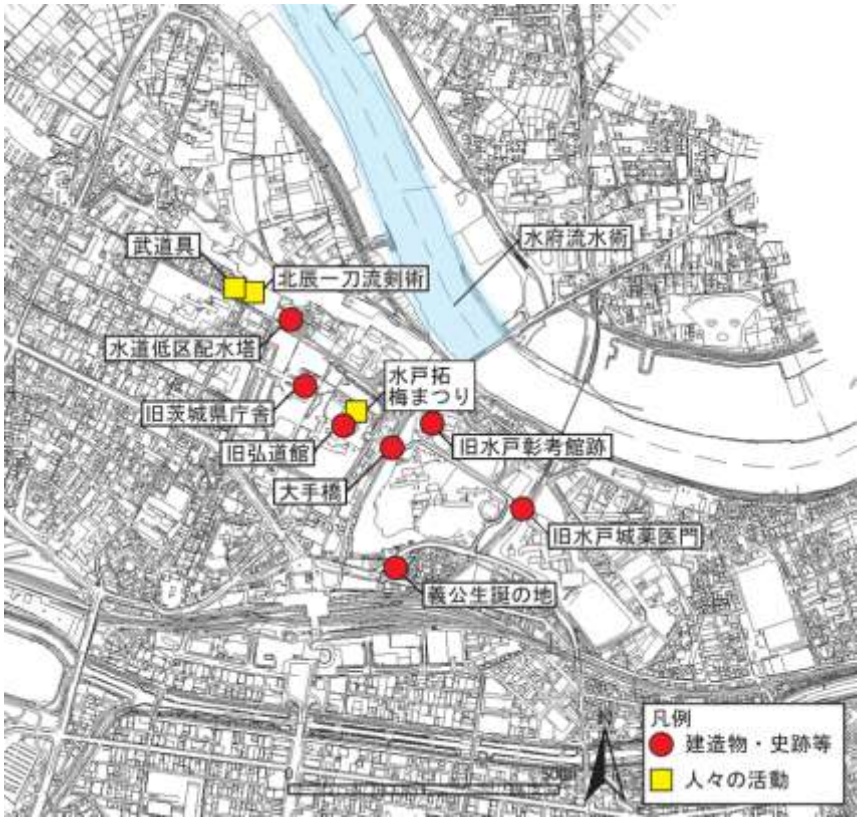
②　地域区分ごとの歴史的資産

ア）弘道館・水戸城跡周辺

弘道館や水戸城跡を中心とする地区は，現在も各種の学校や官公庁が立地する文教地区であり政治の中心地であるが，いまも江戸時代の土塁や堀が残り，城跡や武家屋敷の風情が残っている。近年この地区は，三の丸歴史ロードの整備をはじめ，三の丸小学校等の地区の歴史性・文化性に配慮したデザインの建造物が増加している。また，水戸黄門でおなじみの，水戸２代藩主徳川光圀の生誕の地も立地している。

水戸駅北口を出ると，目前に水戸城跡の一角である斜面緑地を望むことができる。ここにはかつて城塀や隅櫓が建っていた。ここから，徒歩５分ほどで旧水戸城三の丸に設けられた弘道館に着く。東に当時をしのばせる大手橋，その先に左右に広がる土塁と城の入口があり，ここに明治中ごろまで大手門が建っていた。大手門の先には，徳川光圀以来２５０年の長きにわたり大日本史が編さんされた水戸彰考館の跡地がある。

水戸城の天守閣であった三階櫓は，昭和 20 年 8 月の空襲で焼失するまで，水戸市のシンボルであり続けた。現在では，残された土塁，堀，薬医門が往時をしのばせる。



【建造物・遺跡等】

旧弘道館（重要文化財・特別史跡）

旧弘道館正門

弘道館は，水戸藩第９代藩主徳川斉昭により天保 12 年(1841)に創設された藩校である。水戸城内の 178,431 ㎡という広大な敷地を充てられた。これは藩校の敷地としては全国最大の規模であった。なお現在，特別史跡として指定されている面積は 34,105 ㎡である。

施設は正庁・至善堂・孔子廟・八卦堂・鹿島神社・文館・武館・天文方・医学館・寄宿寮・調練場・矢場・砲術場ほか多数設けられ，その配置には建学精神に即して独特の工夫がこらされた。これらのうち，正門（附塀含む），正庁，至善堂は重要文化財の指定を受けている。

弘道館は現在でいう総合大学としての性格を有し，向徳館（鳥取藩）や明道館（福井藩）など他の藩校建設に影響を与えた。

水戸城跡（塁及び濠）（県指定文化財）

水戸城は，鎌倉初期頃に馬場資幹がこの地に館を築いたのが始まりと言われている。その後応永 33 年（1426）年に江戸通房（えどみちふさ）が水戸城を攻略し，以後 160 年間，江戸氏の本拠地となった。

水戸城跡（県三の丸庁舎前）

天正 18 年（1590），佐竹義宣が江戸氏を滅ぼし，13 年間水戸を居城とした。佐竹氏が秋田に移った後，慶長 14 年（1609）年に徳川頼房が水戸に封ぜられ，水戸城は水戸徳川家 260 数年の領域支配の中心地として，関東の城郭のなかで重要な位置を占めた。

江戸時代の水戸城は石垣が構築されず，また「武家諸法度」や「一国一城令」を考慮して天守を建築することがなかったが，地形をたくみに利用した縄張がなされ，全国屈指の大規模な土塁と空堀（県庁三の丸庁舎前）が構築されるなど，徳川御三家の居城にふさわしい風格を備えた城郭であった。二の丸には御殿と三階櫓を擁したが，明治初期や昭和 20 年の戦災で焼失した。

現在は，本丸跡，二の丸の入口，県三の丸庁舎前の３ヵ所の土塁と空堀が県指定史跡となっている。

旧水戸城薬医門（県指定文化財）

この門は，かつて旧水戸城二の丸に入る不開門といわれていたが，その後の調査の結果，本丸から二の丸に通ずる橋詰門と一致していることが判明した。

建築的特徴は，正面の軒が深く風格のある門構えとなっている。建立年代は，建築様式から安土桃山時代末期と考えられる。

旧水戸城薬医門

旧水戸彰考館跡

水戸彰考館は，元禄 11 年(1698)，「大日本史」編さんのため，２代藩主光圀により水戸城二の丸に開設された。彰考館では修史作業のほか，関連する諸書の編さんや古典の研究等も行われ，近世学問史上に大きな影響を及ぼした。また，史料を可能な限り捜し求め，その経過と出典を逐一注記したり，那須国造碑の調査のため日本最初の学術的発掘調和を実施したりするなどの高度な学問的姿勢は，実証的学問研究の原点として評価されている。現在，旧水戸彰考館跡は水戸第二中学校の敷地となっている。跡地を示す石碑や説明板が設置されているほか，学校の校舎も水戸城跡の景観に配慮したものに改築されている。

旧水戸彰考館跡

義公生誕の地（市指定文化財）

徳川光圀（義公）は水戸初代藩主頼房の第三子として，寛永５年（1628）この地にあった重臣三木仁兵衛之次の屋敷で生まれた。母は谷久子であるが故あってひそかにこの屋敷に寄寓し，光圀は幼名長丸（のち千代丸）と称し，5 歳の時公子として水戸城内に居住し，寛永 10 年（1633）６歳の時正式に世嗣として江戸の藩邸に移り父の教育を受けた。当初の三木屋敷地は，現在の JR 常磐線の線路とかつての千波湖岸に挟まれた地点にあったといわれる。現在生誕の地としているところは，それよりわずかに北側の水戸城跡二の丸南崖下に位置し，三木之次の末裔により祠堂が建てられたところである。

義公生誕の地

旧茨城県庁（現茨城県三の丸庁舎）

旧茨城県庁は，明治 15(1882)年に建てられた県庁が老朽化したことに伴い，昭和 4(1929)年に起工された。

この庁舎はゴシック様式の建物で，鉄筋コンクリート造り，地上４階（創建時３階）地下 1 階，中央に高さ 33mの塔屋を有した。デザイン，外装，スタイルに昭和初期の建築の流行を見ることができ，明治以降の洋風建築の中で県内最大の規模を誇る。

昭和 20(1945)年８月２日のいわゆる水戸大空襲では，職員たちの決死の消火活動により焼失を免れた。そのため戦後も旧県庁舎は県内を代表する近代洋風建築物として堂々たる風格をそなえ，今に至っている。平成 11 年(1999)，本庁舎が市内笠原の地に移転した後も，映画やテレビドラマのロケーションの場として頻繁に活用されている。

旧茨城県庁

水戸市水道低区配水塔（登録有形文化財）

水戸は江戸時代以来，まちの生命線ともいえる上水道の確保が常に問題となり，その対策に苦しんできた。近世以来，パイプラインの第一であった笠原水道（県指定史跡）は藩の援助を失い，衛生上の問題も重なったため，水戸市当局は紆余曲折の末，昭和 7(1932)年に水戸市街地全体を給水区域とした近代水道事業を完遂した。

水戸市水道低区配水塔はその一環として昭和 6(1931)年に起工されたものである。高さ 21.6m，直径 11.2mの円筒型コンクリート造の塔で，外壁はゴシック風様式の凝った装飾が施され，その見事な外観から昭和 60(1985)年には近代水道 100 選に選ばれた。

低区配水塔は平成 11 年度(1999)に水道施設としての約 68 年間の役割を終えたが，その後も水戸の近代水道の象徴として，上水問題で苦しんだ江戸時代以来の水戸の歴史を今に伝える貴重な近代化遺産として保存され，現在は公園として市民の憩いの場となっている。

水道低区配水塔

大手橋

大手橋は水戸城の二の丸と三の丸をつなぐ重要な橋であり，現存する擬宝珠（彰考館徳川博物館所蔵）には文禄 3(1594)年の銘が認められることから，16 世紀からの伝統を受け継ぐ橋でもある。

昭和 10 年(1935)に近代工法により架け替え工事が行われた。橋梁の土台部分は一部が石造り，イギリス積みの煉瓦造りとなり，近代建造物独特の重厚感を窺わせる一方，高欄部分は鉄製の擬宝珠を取り付けるなど旧大手橋の外観を模しており，水戸城内という歴史的環境を意識した造りになっている。

大手橋

現在も大手門は「三の丸歴史ロード」のひとつとして，県内外からの観光客や市民がにぎわう場となっている。

水戸東武館

水戸東武館は，弘道館指南役として北辰一刀流を教授していた小澤寅吉（1830～1891 年）が，弘道館閉館後，武芸の衰退を憂い，弘道館の武芸活動を将来の世代に伝えるため，弘道館にほど近い場所に明治７年に道場を設けたのが始まりである。

以後水戸東武館では，７代の長きに渡り，弘道館の教育理念であった「文武不岐」の額を掲げ，弘道館武芸である北辰一刀流剣術（市指定文化財），新田宮流抜刀術，薙刀の正統を受け継いでいる。

水戸東武館の門と道場は，昭和 20 年の水戸空襲により一部が焼失したが，昭和 28 年に再建された。門は弘道館指南役として藩士に列せられた小澤家に相応しい武家屋敷の風格を有する。また，道場の床板は全部五間通しで，幅５寸，厚さ１寸２分の杉材が用いられている。焼失を免れた当初材も再建時に使用され，人々の活動と建造物が一体となって弘道館武芸を継承し，その歴史的価値は高い。

現在，弘道館脇を通り，水戸東武館に通う門人の往来は，往時の弘道館武芸の隆盛を想起させるものであり，こうした歴史的景観を醸成する水戸東武館は，弘道館武芸の象徴的存在となっており，弘道館・水戸城跡周辺地区の歴史的風致を形成するうえで不可欠の建造物と言える。

水戸東武館

【人々の活動】

水戸拓

水戸藩の藩校・弘道館に伝わる水戸藩主や志士たちの遺墨を拓本にしたものが，水戸拓である。その歴史は，江戸時代文政年間に水戸の薬問屋だった岩田健文氏が長崎で中国人から拓本の技術を学び，持ち帰ったのが始まりといわれる。その後，弘道館内で本の出版を手がけていた北澤家に受け継がれ，今日に至っている。現在，北澤家に伝わる版木は，二代藩主光圀，九代斉昭，そして藤田東湖のものなどその数は 100 点を超える。大日本史の量産の目的もあったといわれており，幕末から近代の産業史を語る上で貴重な資料である。

水戸拓の版木

北辰一刀流剣術（市指定文化財）

幕末の剣豪，千葉周作が創始した日本の剣術を中心とした古武道の流派の一つである。周作やその子らは水戸藩に仕え，水戸三流の一つとして北辰一刀流の師範をした。また，海保帆平は弘道館で剣術を指導した。弘道館剣術方教授であった小澤寅吉が，明治時代に道場・東武館を開き，北辰一刀流を指導したことで，明治以降，今日に至るまで水戸の地に残ることとなった。現在，水戸東武館をはじめ北辰一刀流の道場はいくつか存在するが，水戸伝の形は千葉周作遺稿と多くの部分が一致しており，歴史的価値も高い。

北辰一刀流剣術

武道具

剣道具が現在の面，甲手（こて），胴，垂れの形となったのは，明治の中頃といわれている。「水戸の剣道具」は大正期に製造が始まり，丈夫で使いやすいと高く評価されている。仁徳朝もしくは清寧朝に武甕槌神（鹿島大明神）により太刀が授けられて，「鹿島の太刀」が創始されたとの伝承がある。茨城における武術の歴史は古く，その

旧城下町にある武道具店

武術の歴史は脈々と受け継がれてきた。江戸時代に，徳川光圀や斉昭が文武両道を説き，藩校・弘道館が創設され，剣道が盛んになったことはよく知られている。剣道が衰退した明治維新後も水戸の小沢寅吉氏が東武館を設立し，剣道復興がはかられ優れた範士を輩出している。

水府流水術（市指定文化財）

水府流水術は，水戸に古くから発達した武術で，水戸城とその城下に面する那珂川を利用して奨励され，多くの子弟が修行に励んだという。泳法は「のし泳ぎ」を基本とするが，上町流は元禄年間に島村孫衛門正広が指南し，下町流は小松郡蔵，荷見守壮が指導していた。斉昭が弘道館を開くと，はじめて水府流水術と命名し，武術の１科目として奨励された。

那珂川での遠泳

泳法は横体のほか平体・立体・潜水・浮身などがあり，明治以後も広く普及した。昭和 45 年(1975)に設立された水府流水術協会によって，現在に至るまで保存伝承されている。

イ）偕楽園・千波湖周辺

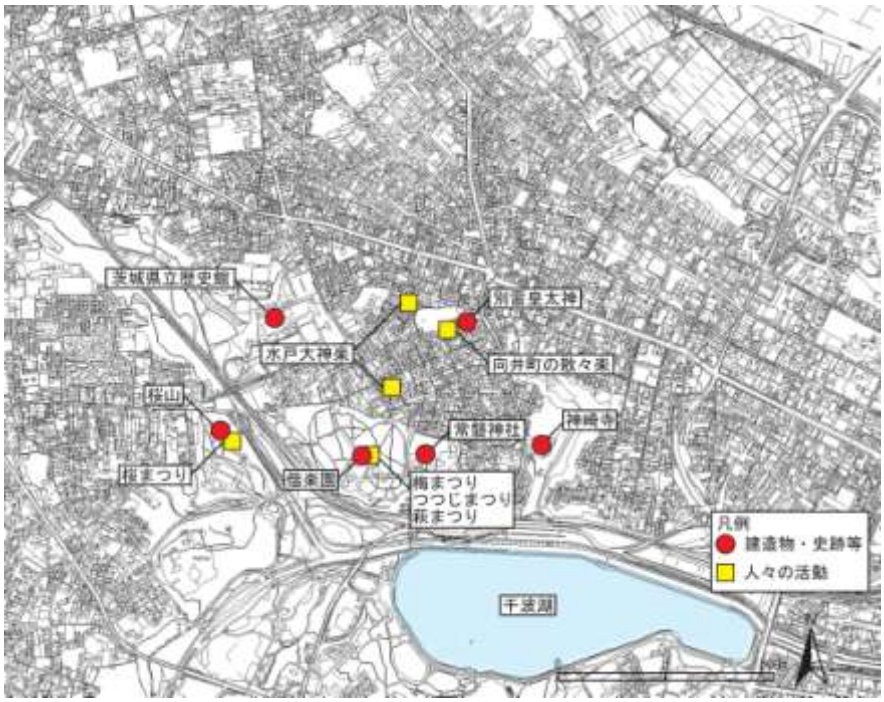
国指定史跡・名勝である常磐公園（偕楽園）と，その借景公園である千波湖を中心とするこの地区は，岩間街道，江戸街道の起点地区でもあり，江戸時代から今に至るまで多くの人たちが往来するところでもある。

弘道館と対になる施設として徳川斉昭により設計・造園された偕楽園は，学問・修養における「一張一弛（いっちょういっし）」を重視し，広大な梅林や園内から望む千波湖，桜山などを借景に持ち，名園の一つにも数えられる。

偕楽園の借景を構成する千波湖周辺は，その景色の素晴らしさから，四季を通して多くの人々でにぎわう。春の梅や桜，秋の紅葉，魚釣りに集う親子連れ，野鳥観察など，市民をはじめとした憩いの場となっている。偕楽園を含む桜山・護国神社，千波湖及び周辺の斜面緑地は，千波公園として都市公園に位置付けられ，中心を流れる桜川とともに，その景観の美しさのみならず，農業用水，漁業，水運など昔から市民との大きな関わりをもっている。

偕楽園周辺は，県立歴史館，県近代美術館，徳川博物館などの歴史・文化施設，雨乞い・雷よけの雷神さんで親しまれている別雷皇太神や神応寺，神崎寺，信願寺，護国神社，徳川光圀・徳川斉昭を祭る常磐神社など多くの寺社仏閣が残る地区であり，閑静な住宅街を形成している。

そのほか，偕楽園近傍（常磐神社南側斜面付近）には，かつて水戸藩の七面製陶所が立地しており，現在，市民有志により七面焼の再興が試みられている。また，地区内には江戸時代から続く「水戸大神楽」の拠点があり，祭礼や村廻りを中心に伝統芸能の継承が行われている他，地区住民による「向町の散々楽」の継承も行われ，現在は別雷皇太神の秋祭りに奉納されている。



偕楽園・千波湖周辺

【建造物・遺跡等】

常磐公園(偕楽園)（史跡・名勝）

偕楽園は天保 13 年(1842)，徳川斉昭が，弘道館員の修学休養の場として千波湖岸の景勝の地に造成・開園した。また，「衆と偕(とも)に楽しむ」という趣旨のもと，一般にも開放された稀有な特色を持つ大名庭園として知られる。

園内には三階建ての好文亭（昭和 33 年再建）があり，太鼓橋から奥御殿（昭和 47 年再建）に接続している。

亭の外側には創建当初 200 余種，約１万株ともいわれる梅林と，ツツジ・ハギ・杉・孟宗竹などが植栽された。園内には表門，偕楽園記碑，仙奕台，仙湖暮雪碑，吐玉泉などの遺構がある。また，偕楽園本園の借景を形成する飛び地の桜山は，桜の名所として知られ，今日も多くの市民に親しまれている。

偕楽園内の好文亭

常磐神社

明治４年（1871），水戸を中心とした旧藩士民が，２代藩主光圀（義公），9 代藩主斉昭（烈公）の徳を慕い，偕楽園に祠堂を建てた。明治６年，常磐神社の社号を賜って県社となり，翌年現在地に社殿を創建した。昭和 20 年(1945)，戦災で焼失したが，33 年(1958)に復興した。

境内には藤田東湖を祀った東湖神社，義公烈公の遺品を陳列した義烈館などがある。

常磐神社

別雷皇太神

雷神さんで親しまれているこの神社は，奈良時代に京都の上賀茂神社から水戸大坂の地（北見町）に分祀して大坂大明神と呼ばれていたが，佐竹氏が神生平(鷹匠町)に，さらに徳川光圀が寛文６年（1666）今の地に移した。

別雷命をまつり，雨乞い，雷除けの神として広く農家の人々からも信仰されてきた。また，取子の行事や古式の散々楽などが残されている。

別雷皇太神

【人々の活動】

梅まつり

偕楽園においては，来訪者が梅林を散策したり，好文亭あたりの風景を賞しながら歌を吟じたりしたと伝えられるが，明治29 年，水戸・上野間の鉄道開通を機に観梅列車が運行されるようになると，多くの観光客が訪れるようになった。こうした観光客へのもてなしを目的に，同年から始められたのが「水戸の梅まつり」である。

現在，梅まつりでは紅梅・白梅が咲き誇るなか，野点茶会などの催事が行われる。

梅まつりの風景

七面焼

徳川斉昭は領内の殖産興業の一つとして，陶器生産を考え，家臣に陶土の調査をさせたり製陶技術を学ばせたりした。そして，天保４年(1833)，斉昭は水戸城東の瓦谷に陶製所を開設し，天保９年(1838)には水戸城西の神崎七面堂の南側（現在の常磐神社南側斜面あたり）に陶窯と製品販売所が設置された。この七面製陶所の築造に伴い，瓦谷の製陶所は合併した。そしてこれを七面焼と呼ぶようになったのである。ここでは領内の町田（現常陸太田市），小砂(こいさご)(現栃木県那須郡那珂川町)にて産出された粘土を使うことで，陶器のみならず磁器をも生産しており，その技術習熟度はかなり高いと評価される。殖産興業に対する斉昭の並々ならぬ意気込みをそこに感じ取ることができる。現在は，伊藤瓢堂(ひょうどう)氏などが七面焼の復興に取り組んでいる。

七面焼蓋付土瓶

向井町の散々楽

渡里町長者山周辺にいた豪族「一盛長者」が，八幡太郎義家に滅ぼされた折に，家臣がささらを持ち出し向井町に住み着いたことから，「向井町ささら」の名が付いたという伝承をもつ。竹の棒に人形を付け，底抜け屋台の中で操るため，棒ささらと呼ばれる。雄獅子，雌獅子，子獅子の三体があり，行列の時は猿田彦命を先頭に翁

向井町の散々楽

や土俗面の九人仮面童子が参列する。

「新編常陸国誌」によれば，東照宮の祭礼において露払いとして，行列の先頭を飾ったと記されている。現在は，元山町の別雷皇太神の秋祭りに奉納されている。

水戸大神楽（県指定文化財）

水戸大神楽は宝永２年(1752)，吉田台町の栗林主計が東照宮祭礼に神楽囃子として供奉したのを起源とする（「新編常陸国誌」）。天明５年(1785)にその株を譲り受けた足黒村（現茨城町）の宮内求馬が御用神楽司となった（「太田村御用留」）。その後，16 代鴨川嘉之助から 17 代柳貴家正楽へと引き継がれてきた。

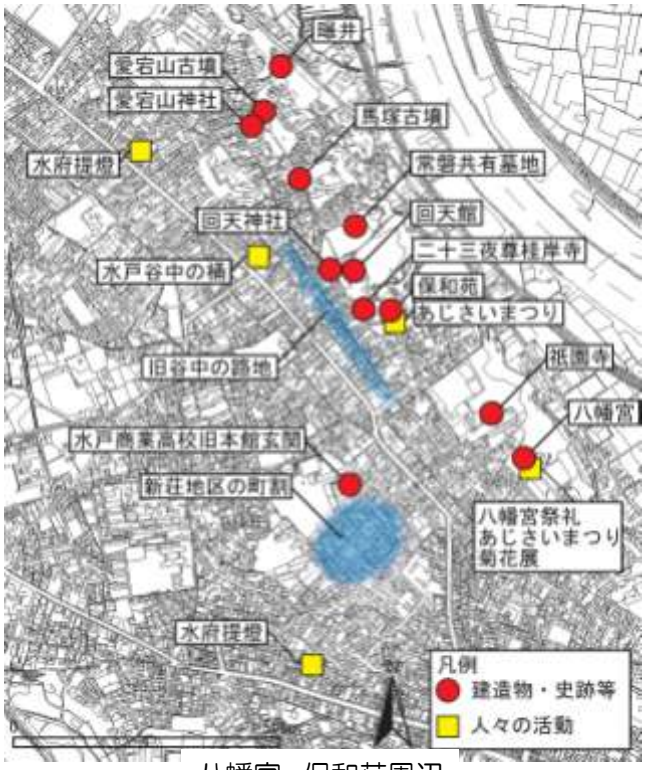
水戸大神楽

大神楽は，獅子舞によって悪霊を祓い，合わせて曲芸を演じる芸能である。現在は 18 代柳貴家正楽社中と，同社中から分かれた柳貴家勝蔵社中とが継承し，その普及・啓発に努めている。

ウ）上市地区

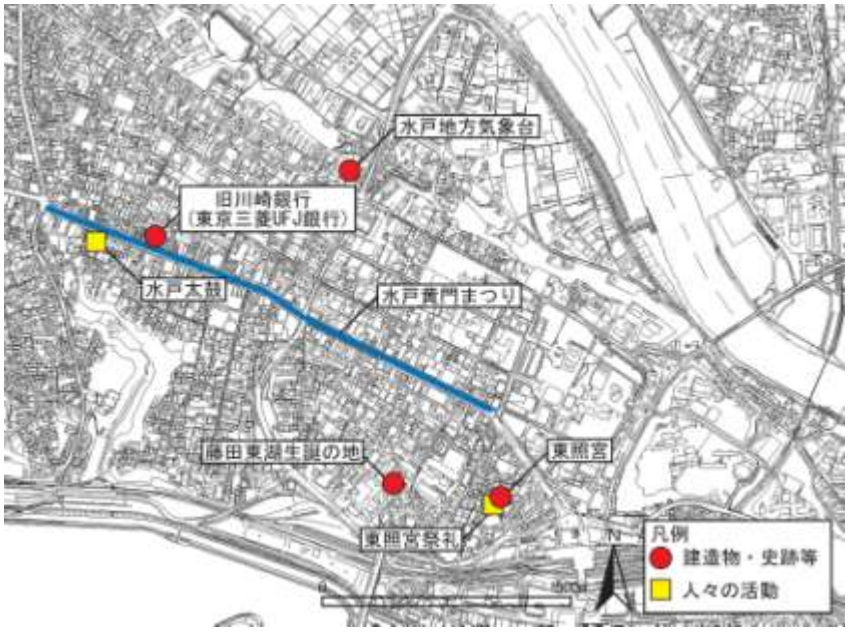
上市地区は，水戸城西側の馬の背状の台地に形成された旧城下町のエリアである。かつては武家屋敷や町人町が広がり，その周辺に寺社群が立地していた。

特に，北西部の八幡宮や保和苑を中心にする地区は，戦災による被害が少なく，昔ながらの土蔵や近代化建築物などが残存しているほか，江戸時代から続く堤燈店なども営業している。八幡宮をはじめ，祇園寺，保和苑，二十三夜尊桂岸寺，回天神社，常磐共有墓地，馬塚古墳，愛宕山古墳・神社，曝井など歴史的資源が集積するとともに，寺町・花町として栄えた名残を残すまちなみをもつ。城下町時代にさかのぼる旧町名からみると，八幡町，馬口労町，谷中などの町人の町や，天保期に新屋敷として形成された楓の小路，桜の小路，梅の小路の武家屋敷など，当時をしのばせるまちなみと町割が今も健在である。



八幡宮・保和苑周辺

一方，戦災で大きな被害を受けた現在の中心市街地周辺については，戦災復興事業で国道 50 号が拡幅され本市の中心商店街として発展を遂げているものの，基本的な町割に大きな変化は見られず，複雑な裏通りや堀跡，東照宮や藤田東湖生誕の地などの史跡に往事の面影をみることができる。



中心市街地周辺

【建造物・遺跡等】

八幡宮本殿（重要文化財）

建築年代は，内部の羽目板裡に残された墨書などによれば，慶長３年(1598)である。随所に見られる手の込んだ手法には，組物や彫刻などに桃山から江戸初期の時代と地方色が見られる。入母屋造り，とち葺き，正面に 3 間の向拝をもつ，和様・唐様の折衷様式である。当初，八幡小路（北見町）に鎮座され，元禄７年(1694)に那珂西村（城里町）に移り，宝永５年(1708)現在の地に移築されたことが，墨書・棟束により明らかになっている。

平成 10 年には，本殿の全面解体保存修理が完了し，安土桃山時代創建当時のきらびやかな彩色が復原されている。

八幡宮本殿

桂岸寺と保和苑

「三夜さん」の名で知られる二十三夜尊桂岸寺は，佐竹氏の護持仏として全隈町地内にあったものを，天和２年（1682）当時の城代家老中山備前守が今の地に移したと伝えられる。特に霜月三夜は参拝客でにぎわう。

また，隣接する庭園「保和苑」は元禄時代，徳川光圀が寺の庭を愛でて「保和園」と名付けられたのが始まりといわれる。昭和初期，地元有志の手によって拡張整備され，池に築山を配した純日本庭園になり，現在の名前となった。昭和 25 年，桂岸寺より水戸市へ移管されたことにより，昭和 36 年地元と市による保和苑振興協議会が発足し，運営されている。

保和苑では，毎年 6 月中旬から７月上旬頃まで「あじさい祭り」が開かれ，約 6,000 本のあじさいが，池のほとりや築山に咲き競い，静かな苑内を鮮やかに彩る。

二十三夜尊桂岸寺

常磐共有墓地（市指定文化財）

徳川光圀は藩主就任直後，士民の信仰を正し迷信を打破して生活を守るために徹底した社寺改革を行った。特に寛文６年（1666）には，常磐村と酒門村に藩士の墓地を与え，無料で使用させ，墓石を規定し自葬による簡素な葬祭儀式を勧めた。

この墓地には，彰考館総裁として修史に功績のあった安積澹泊，大井松隣，藤田幽谷，豊田天功等の学者，幕末の改革に活躍した藤田東湖，吉成南園等，名医本間玄調等のほか，幕末の志士が数多く葬られている。

常磐共有墓地

水戸殉難志士の墓（市指定文化財）と回天館

明治３年(1870)，いわゆる「天狗党の乱」で落命した志士の墓を，常磐共有墓地の隣地で現在の回天神社境内に建立したのが始まりである。その後大正 3 年(1914)に当時判明する志士たちをしのんで「水戸殉難志士の墓」が建立され，現在も墓石 371 基が整然と並んでいる。昭和 44 年(1969)には，この地に安政の大獄，桜田門外の変，坂下門外の変等の幕末期の動乱で落命した志士全ての霊を慰めて後世に伝えるため，「回天神社」が造営された。

水戸殉難志士の墓

「回天館」は，元治元年(1864)に「天狗党の乱」で敗れ，投降した天狗党志士 800 余名が，処分決定の間に捕縛・監禁された越前新保（現福井県敦賀市）にあった 16 棟の鰊倉のうち１棟を，後に敦賀市より譲り受けて常磐神社境内に移築したのが始まりである。しかし，歳月の経過とともに老朽化が進み，水戸市有志によって，平成元年(1989)に回天神社境内に移築した。現在は保存会によって管理され，天狗党の資料などを展示し，永く顕彰することを目的としている。扉や板壁などには牢居していた人々の血書の文字が散見され，武田耕雲斎以下多くの志士達が処刑されるまで拘置されていた当時の状況がうかがえる。なお，「回天」とは，当時水戸藩士の思想的リーダーであった藤田東湖の著作『回天詩史』から採られている。

敦賀市から移築された鰊倉

祇園寺

開山は明の僧心越禅師(しんえつぜんじ)，開基は徳川光圀。心越は延宝５年(1677)来日，天和元年(1681)光圀の招請で水戸の天徳寺に住し，元禄８年(1695)の死去までこの寺で過ごした。正徳２年(1712)四世大寂界仙(だいじゃくかいせん)のとき，従来の岱宗山(たいそうざん)天徳寺を河和田村に移し，そのあと壽昌山(じゅしょうざん)祇園寺と改め，心越禅師をもって開山とした。曹洞宗寿昌派の本山となり，知行 100 石を与えられた。

祇園寺

境内には心越の墓塔，元禄７年(1694)建立の穢跡(えせき)金剛尊天堂がある。また，水戸藩重臣で幕末期に諸生派として活躍した市川氏・朝比奈氏らの墓所がある。近年の著名人では，洋画家の中村彝(つね)，詩人の山村暮鳥(ぼちょう)，漫画家の山田みのるの墓などがある。

愛宕山古墳（史跡）

愛宕山古墳は，その営造時期が５世紀に遡ると推定される前方後円墳である。墳丘全長 137m，後円部径 78m，同高 10m，前方部幅 73m，同高９m を測る茨城県内第３位の規模を誇る大型古墳である。後円部が高く，くびれ部が明瞭で前方部が幅広な墳形は，典型的な中期古墳と考えられるものである。現在でも後円部に愛宕神社が鎮座し，宗教的求心力を損なわずにいることは，中世以来各地域でみられる古墳の再利用の典型的な事例として歴史的価値をもつものであり，現代社会と古墳との関わり示す例として注目される。

愛宕山古墳

なお愛宕神社は，天慶元年(938)に山城国愛宕郡愛宕神社から分霊，常陸国府中に勧請したのが最初であるといわれ，現在地に遷座したのは天正８年(1593)である。社殿は東に面し，水戸七社として水戸城を守護したとされ，現在でも火除けの神様として広い信仰を集めている。現在では毎年除草等が行われ，史跡としての保全も図られている。

曝井（さらしい）

那珂川に面した台地北側斜面で，文京１丁目と愛宕町との境のあたりに滝坂，曝台という地名を遺すところがある。『万葉集』巻九に「三栗のなかに向へる曝井の絶えず通はむそこに妻もが」という歌がみえ，『常陸国風土記』には，「其より南に当たりて泉坂の中に出づ多に流れて尤清し曝井と謂ふ泉に縁ひて居める村落の婦人夏月会集して布を浣ひ曝し乾せり」とあって，那賀郡衙の周辺すなわち台渡里廃寺跡の周辺に曝井とよばれる場所があったことがわかり，他の遺跡との相関関係から「曝井」に該当する場所は滝坂周辺であると推定されている。歌や『常陸国風土記』の内容から，「曝井」が男女の逢い引きの場となっていること，女性達が集まる場所となっていることが明らかであるが，こうした場所は交通史の観点からいえば，衡（ちまた）としての性格をもつ場所として注目される。現在当該推定地は，市民団体「常陸万葉の会」によって，説明板が立てられ，保全されている。

曝井の推定地

東照宮

水戸初代藩主頼房が父家康のため，元和７年(1621)日光東照宮にならい常葉山に造営したもの。はじめは社僧が祭事を行ったが，斉昭が天保 14 年(1843)，神官に祭事をつかさどらせた。例祭は家康の亡くなった４月 17 日で，水戸御祭礼といった。

社殿は旧国宝であったが，昭和 20 年(1945)戦災で焼失，37 年(1962)に復興した。社宝に斉昭考案の安神車や常葉山時鐘（共に市指定文化財）などがある。

水戸東照宮

藤田東湖生誕の地（市指定文化財）

藤田東湖生誕の地

徳川斉昭の片腕，幕末志士の指導者と言われた藤田東湖は，文化３年(1806)この地にあった藤田幽谷の屋敷で生まれた。若い時から父の私塾青藍舎で学問し，また江戸へ出て槍剣を学んだ。父の没後彰考館に勤め，斉昭が藩主となると抜擢されて藩の大改革を進め，弘道館の建設等に尽力したが，斉昭が幕府から処罰を受けると幽閉されて多くの著書を著し，ペリー来航後は江戸で活躍したが安政の大地震で圧死した。

現在，生誕の地には東湖像や顕彰碑が建立されている他，屋敷の敷地にあった井戸屋形が復原されている。

水戸商業高校旧本館玄関（登録有形文化財）

この建造物は県立水戸商業高校の前身，旧商業学校の本館の玄関部分である。設計は旧土浦小学校本館（国指定重要文化財）を手がけたことで著名な駒杵勤治で，明治 37(1904)年に竣工した。屋根にドームを載せたロココ調の建築で，内部の壁や天井にも美しい漆喰の彫刻が施されている。その優美な姿は地元新聞社から「ベルサイユ宮殿を模した」とまで評され，現在も水戸商業高校に通う生徒たちの誇りとして，大切に保護されている。

水戸商業高校旧本館玄関

水戸地方気象台

水戸地方気象台は茨城県最初の測候所として明治 29(1896)年創設された。現在の水戸地方気象台は昭和 10(1935)年に改築されたもので，昭和を代表する建築家である堀口捨巳の設計である。平屋の庁舎と３階建ての測風塔を持ったＬ字型の建物で，装飾を取り払い，機能面を重視した外観となっている。モダニズム建築の先駆者として著名な堀口ならではのデザインといえよう。

水戸地方気象台は現在も茨城県の防災気象情報の発信拠点として，県民の生命と財産を守り続けている。

水戸地方気象台

【人々の活動】

八幡宮例大祭

八幡宮の例大祭は毎年４月 15 日にとり行われる。早朝よりの祭礼に続き，宝永 2 年(1705)に造られた黒漆金銅装八角神輿が市内を巡幸する。これを「つばな引」神事と呼ぶ。元禄７年(1694)，本殿（社殿）を那珂西（現・城里町）へ移築後，宝永４年(1707)，水戸の現在地に再び移築する際，那珂川を舟で下り，八幡川原に上陸されて還宮式が厳修された故事に習い行われている。

山桜も満開のころ，本殿もライトアップされ，夜遅くまで人出が絶えない。

八幡宮例大祭

東照宮例大祭

東照宮の祭礼は，江戸時代には親藩である水戸藩において，最も中心となる祭礼であった。「新編常陸国誌」等の資料によれば，向井町の散々楽や水戸大神楽もこの祭礼に奉納されていた。祭礼は正保３年(1646)4 月 17 日に初めて巡幸し，毎年この日に行うようになった。貴賤上下に関わらず参加し，様々な場所から見物人が訪れた。御輿の他に様々な趣向を凝らした渡り物と呼ばれる風流物が練り歩き，芸をするものも多く，各所に辻番をたてるなどして盛大に執り行われてきた。

現在も，毎年４月 17 日に実施されており，水戸駅前等を御輿が巡幸するという水戸市域の主要な祭礼の一つである。

東照宮例大祭

水戸黄門まつり

毎年８月上旬に開催される水戸市最大の夏の祭典。市内の山車や神輿が一堂に会し，各寺社仏閣の祭礼の普及・啓発活用の側面も担っている。

祭りの由来は，戦前から行われていた地元商店会による夏の「七夕まつり」と秋の「広告祭」をもとにしたもので，昭和 36 年(1961)に「第１回水戸の七夕黄門まつり」として行われたのが始まりである。第 32 回以降，名称を「水戸黄門

水戸黄門まつり

まつり」に変更して現在に至っている。歴史的資産を生かした観光・産業振興の場として，市内外の人々に愛されている。

水戸太鼓

追鳥狩の合図として打ち鳴らされた陣太鼓を起源とする。時代に即応して再構成されて現在の「水戸太鼓」の形に至る。

各種行事等にも積極的に参加し，保存・普及・啓発活動に努めている。

水戸太鼓

水府提灯

水戸藩は，藩の経済を支える産業の一つとして，当時，必需品であった提灯の製造を奨励した。以来，水戸は，岐阜，八女（現福岡市八女）と並ぶ，提灯の日本三大産地の一つとなった。水府提灯の特徴は，提灯内側の骨組みを，竹ひごで多くの輪をつくり，それらを糸でひとつに結わえるという「１本掛け」の技法で作るため，堅牢であることで知られている。竹ひごは１本１本が不揃いのため，それらに均一の丸みをつける難しい技術が必要である。竹材には，メダケやモウソウチクが使用される。現在も工法はかわらず，和紙を貼った弓張り提灯，奉納提灯，盆提灯，看板提灯などが地区内の提灯店で製造・販売されている。

水府提燈の製作風景

水戸谷中の桶

現在の桶・樽のように，板を円形に並べてタガで締めるものは，鎌倉末期～室町時代に生まれたといわれる。それまでは木材を曲げて作る「まげもの」が一般的であったが，板を丸く削る台かんなが出現してから，板を隙間なく接合することが可能になり，丈夫で水に強いタガ締めの桶が広く使われるようになった。城下の谷中では，桐，ヒノキ，サワラ，杉，竹など地元産のさまざまな木を使う桶生産が盛んであった。なお，谷中は旧町名で，現在の末広町の一部である。

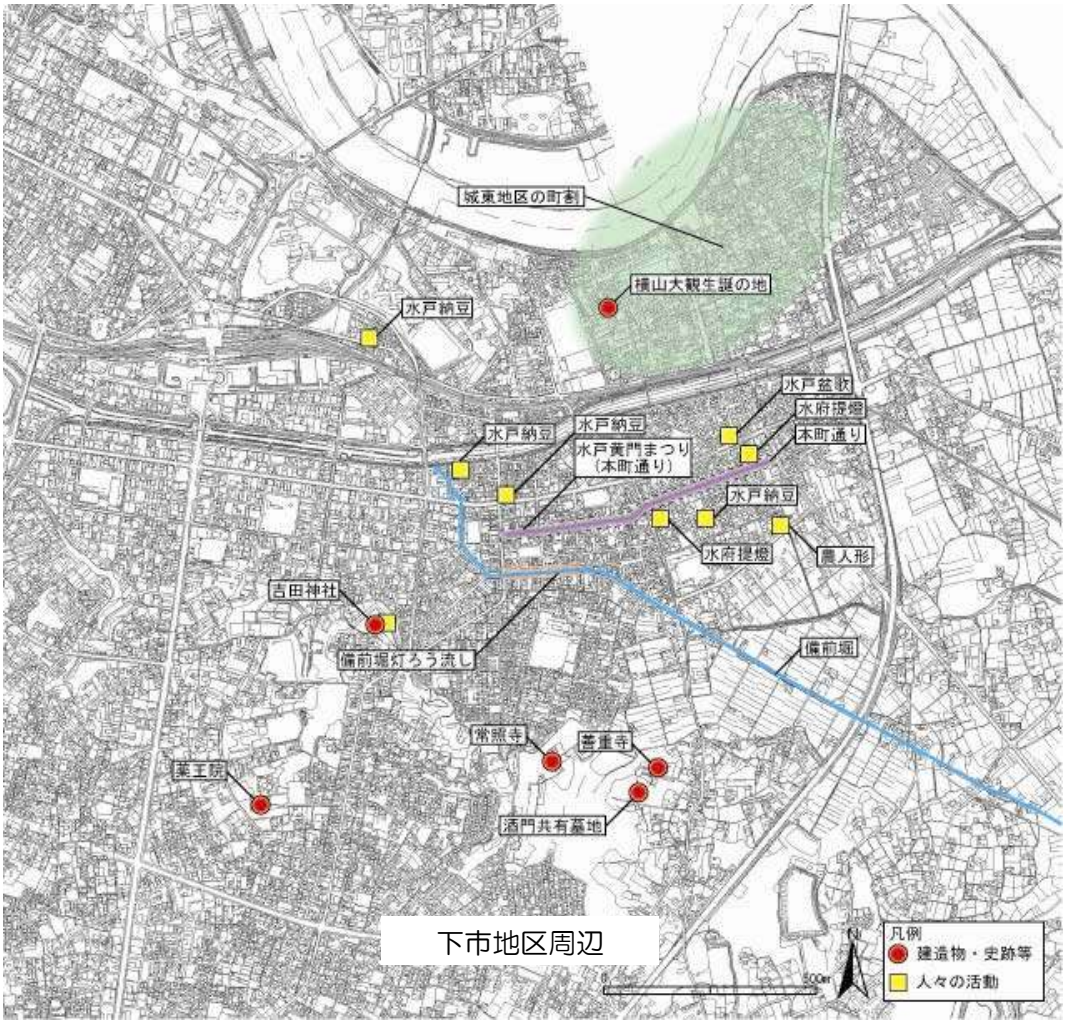
水戸谷中の桶

エ）下市地区

下市は，江戸時代，水戸城及び千波湖の東部の低地に形成された城下町である。南側が町人町，北側が武家屋敷として発展したが，特に町人町を東西に伸びる本町通りは，水戸随一の商店街として明治期ごろまで発展し，現在も近隣商店街を形成している。

その創建年代が遅くとも平安時代に遡るという吉田神社の直近には，その神宮寺である薬王院をはじめ，多くの寺社群が立地する。これらは，下市地区の外縁で，江戸街道（旧水戸街道）に面しており，沿道には門前町が発展した。現在ある商店街がその名残をとどめている。下市を流れる備前堀の沿道には，かつて染物屋が軒を連ねた。現在も数件が営業しており，江戸街道の起点となった風情を際立たせている。

また，武家屋敷の多かった城東地区は，横山大観，常陸山など著名な人物を輩出した所として知られ，地元の小学校などでは，これら先達をはじめとした郷土史の授業が活発に行われている。かつてのまちなみは，戦災などにより大部分が失われてしまっているが，細い路地と屈曲する交差点，均等長方形の町割は，かつての城下のにぎわいを想起させ，情緒あふれる閑静な住宅街を形成している。



下市地区周辺

【建造物・遺跡等】

薬王院本堂（重要文化財）

薬王院は，吉田神社から南の方へ約 800m程の所に位置する。かつては，吉田神社の神宮寺であって，天台宗の名刹としてその歴史も古い。平安時代の開基といわれ，桓武天皇の勅願により，大同２年(807)に最澄が創建したものと伝えられる。

本堂は，大永７年(1537)に再建され，さらに貞享３年(1686)徳川光圀によって大修理が行われた。昭和 43 年(1968)に解体修理され，現在に至っている。茅葺きを模した銅板葺き入母屋造の堂々たる姿で，重要文化財として室町時代の建築手法を今日に伝えている。

薬王院本堂

吉田神社

吉田神社は約 1200 年前の創建と伝えられ，日本武尊を氏神とする神社である。いわゆる延喜式式内社で，古来より霊験著しい明神大社でもある。その創建年代は明らかではないが，当社が武道守護・交通安全の御神徳があるということから，鹿島神宮と並んで，奈良・平安時代における律令国家による征夷（東北地方の蝦夷平定）と深い関わりがあると考えられ，その成立を古く見ることができる。鹿島神宮，静神社についで常陸第三宮とも呼ばれる。社殿は平安時代初期から堂々たる構えで社領も広く，儀式も盛んであった。明治６年県社となったが，その後昭和 20 年(1945)戦災に遭い，同 39 年(1959)に復興した。

吉田神社

備前堀

備前堀は桜川の柳堤橋付近を起点として下市地区を通り国道 51 号に沿って流れ，島田町の涸沼川に流れ込む延長９km の農業用水路である。江戸時代初期の慶長 15 年(1610)に初代藩主頼房の命により，伊奈備前守忠次らによって下市地区及びその東部の村々への用水と，千波湖の氾濫による洪水対策のために造られた。

備前堀

大正７年(1918)から昭和７年(1932)にかけて行われた干拓事業により，千波湖が現在の形に縮小されたため，以後，桜川や那珂川から取水するようになった。（千

波湖の水の一部は桜川を通し現在も利用されている)。

江戸時代から，この用水路を利用した染物屋が軒を連ね，この一帯は現在も紺屋町という町名を残している。大正時代に 10 軒あった染物屋は数が減ったものの，町人町として栄えた往時の姿を今に伝えている。

横山大観生誕の地

日本画の巨匠である横山大観は，明治元年(1868)水戸藩士酒井捨彦の長男として，下市三ノ町（現在の城東２丁目）に生まれた。雄大な水墨画の世界，絢爛たる色彩の屏風絵，晩年の富士山など，日本の伝統を継承しながら，いずれのジャンルにおいても新境地を開き，優れた作品を残すとともに，明治，大正，昭和の三代にわたり，日本画壇の中心的存在として日本の美術界をリードした。昭和 12 年(1937)第１回の文化勲章を受章し，代表作の「生々流転」と「瀟湘八景」は重要文化財に指定されている。

現在，像や顕彰碑などが生誕地近傍の城東小学校敷地内に建立されており，小学生や地区住民らにより，地元出身の先達として郷土史の学習活動等に活用されているが，昨今，地元では本来の生家である旧酒井家屋敷跡に整備を求める動きが出ている。

横山大観像

笠原水道（県指定文化財）

笠原水道は第２代藩主徳川光圀の命により，寛文 3(1663)年に竣工した全国 18 番目の水道である。城下町建設にあたり下市の上水の便が悪く，地下水の水質も不適であったことを受け，上水道建設が着手された。水道は石製の樋を用いて暗渠とし，笠原水源地から下市まで総延長は約 10 kmに及ぶ。他藩の水道が開渠なのに対し，笠原水道は暗渠なのが特徴である。以後，笠原水源および笠原水道は水戸城下町における飲料水の貴重な給水源となり，現在も補助給水源として市民の生活と密接に関わっている。

また，笠原水源を水源地たらしめている周囲の豊かな緑地（逆川緑地）についても，初代藩主徳川頼房以来手厚く保護され，木々の枝葉を折ることさえ堅く禁じられていた。現在もその歴史をふまえ，逆川緑地は笠原風致地区として環境が保全され，市民の憩いの場となっている。さらに近年では笠原水道を環境保全のシンボルとして見直す取組みや，水戸の名水として商品化する取組がなされ，笠原水道は現在も市民に愛され続けている。

笠原水道の水源

【人々の活動】

吉田神社例大祭・神輿渡御

吉田神社の神輿渡御は，毎年１０月１５日、１６日の例大祭に近い土・日曜日の２日間にわたり「水戸の秋祭り」として盛大に行われる。

初日の土曜日は朝の１０時に神社から出された御輿は車に載せられ、旧水戸街道一里塚まで、そして現在の水戸駅南口前の街中から，大神様が上陸した那珂川の川原まで巡幸を行う。夕方からは吉田神社の御輿保存会である鳳会の会員により威勢よく下市商店街を渡御する。そして御仮殿にて一泊した後御輿は日曜日の夕方から再び担ぎ出され各町内を担がれた後神社に還幸されるのは夜の１０時過ぎとなる。またこの両日とも鳳会の山車各町内から飾り付けられた何台もの山車が参加しお囃子と踊りで祭りをさらに盛り上げる。

町内の山車

備前堀燈ろう流し

歴史的資産というべき備前堀を活用し，この地域の７つの団体が共催で実施する市民参加型の夏の恒例行事である。商店街のみならず，市民有志が共同で行なうこの伝統行事は，先祖の霊を弔うという宗教的な意味だけでなく，商業と地域住民の密接な関係のもとに成り立っている。例年８月中旬に午後６時～午後９時まで，銷魂橋から三又橋までの区間において，祭事が盛大に行われている。

備前堀燈ろう流し

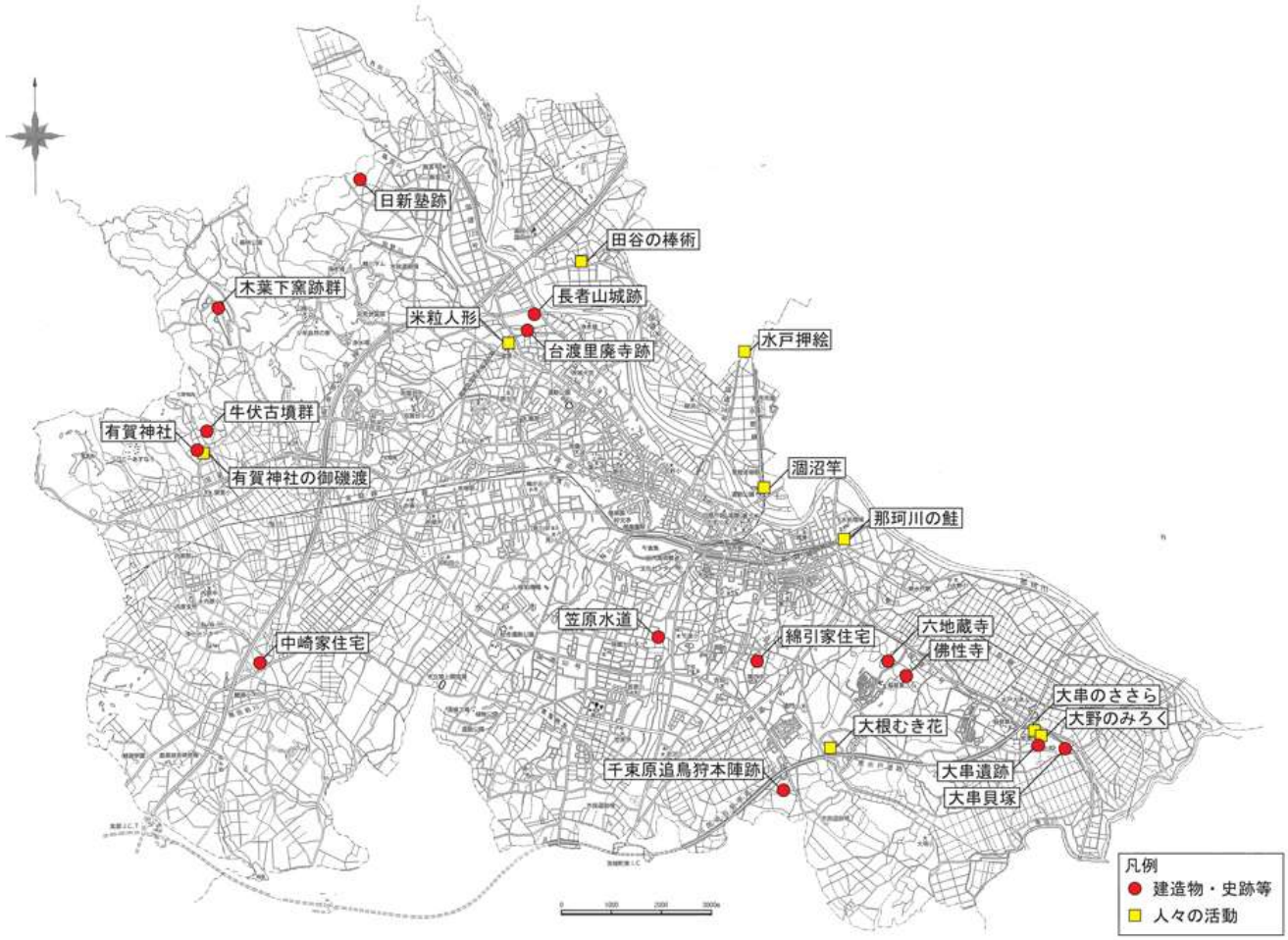
水戸納豆

水戸地方では，古くより藁づとで作られた納豆が一般家庭で常食されており，渡里地区に伝わる一盛長者伝説にその生誕の逸話が現れるほどである。明治 22 年の水戸駅開業以降，駅前や構内で納豆が販売されるようになると，観光客の評判となった。そのおいしさの秘密は，小粒大豆を原料とすることにあり，独特の風味を持つ。

水戸納豆

オ）周辺地区

旧城下町のエリアを中心に明治 22 年(1889)市制施行を行った後，昭和８年(1933)の常磐村合併をはじめとして，戦後の大合併，平成の合併を経て，現在の市域面積は市制施行時と比べ約 35 倍（217.43㎢）となっている。ここでは，これら旧城下町のエリアを除く周辺地域の歴史的資産について記述する。



周辺地区の歴史的資産の分布

【建造物・遺跡等】

佛性寺本堂（重要文化財）

佛性寺は，涌石山大日院を号とする天台宗の寺院であり，県内には類例のない八卦堂がその本堂である。頭貫木鼻，間斗束などの細部の様式が当時の典型的な特色を残している。堂内の墨書から天正 13 年(1585)の建築年代はいうに及ばず，寛永３年(1663)，文化 13 年(1816)の江戸時代，明治９年(1876)，大正６年(1917)などの修復年代を詳細に跡づけることが可能な極めて重要な建造物である。

佛性寺本堂

六地蔵寺四脚門（県指定文化財）

この門は，２本の本柱の前後にそれぞれ控え柱を建てた簡素な造りであり，規模も小さいながらも，細部の様式においては室町時代末期の特徴をよく残している。

本柱は，角柱で上部を細めに造り，棟まで伸びている。垂木もこの時代にふさわしくその先端に強い反りをつけた造りを用いている。頭貫の木鼻や肘木に見られる絵・繰り形などは薬王院本堂のものに類似している。

六地蔵寺四脚門

中崎家住宅（重要文化財）

中崎家は初代藤原左京(天文４年(1535)～元和５年(1619))が兵農分離によって旧鯉淵村に帰農したのがはじまりと伝えられている。現建物の格式からみて庄屋格であったことは疑いなく，水戸城下町近郊農村における豪農の生活を良好に伝える建造物といえる。また，中崎家住宅の北西には，鯉淵城跡の土塁及び空堀が現存しており，以前は南を通る県道まで巡っていたという。

中崎家住宅

明治 26 年に行われた修理の記録に，元禄元年(1688)に建立されたとの記述があることや，建築形式や手法から，近世前期の建造物とされ，地域を代表する民家建造物として国の重要文化財に指定されている。

綿引家住宅（県指定文化財）

この住宅は，江戸時代末期の旧吉田村庄屋の住居である。木造平屋茅葺きの右土間整形６間取り直屋型で，平面は農家形式であるが，土間が狭く居住部が広い。居住部奥に床の間書院付の座敷があり，室境や縁中通りには透し彫欄間が見られる。また，たいこ落としの太い梁材を幾重にも重ねた土間部の小屋組の威容などには，村役人としての役柄を示した家屋構成が見られる。

綿引家住宅

また，屋敷内に残る倉庫は，半間毎に柱を建て，貫を化粧に見せ，目板付縦張りの板壁を内側に張ったもので，入口には，ネズミ返しが取り付けられている。

日新塾跡（市指定文化財）

日新塾は文政 3(1820)年頃，郷士の加倉井砂山が開設した私塾である。砂山は個性尊重・自主性重視の教育を掲げ，その学識と優れた教育方針は藩内外で高い評価を受けた。城下町のみならず全国各地から多くの塾生や遊学の士が集まり，一説には千人を超える塾生を輩出したと言われている。当時の私塾にあって千人規模の塾生を擁した私塾は豊後日田の咸宜園をはじめほんの一握りであり，その意味において日新塾は江戸時代屈指の私塾に位置づけられる。

日新塾跡

日新塾など私塾における学問・教育は，藩校弘道館における学問・教育の初等教育として位置づけられ，藩内の学問・教育システムの重要な役割を果たしていた。日新塾からは斉藤監物（「桜田門外の変」烈士），藤田小四郎（天狗党幹部）など歴史上著名な多くの門人が育った。その中の１人で川崎財閥の創始者である川崎八右衛門の子孫が，現在「財団法人日新塾精神顕揚会」を運営し，日新塾と加倉井砂山の遺徳を伝えているほか，地元住民の支援などもあり，その跡地は市指定史跡として管理がなされており，周辺も市街化が抑制され良好な農村景観をとどめている。

千束原追鳥狩本陣跡（市指定文化財）

徳川斉昭は，欧米列強のわが国周辺に迫る情勢を憂えて，藩の大改革を行ったが，中でも長年の平和に馴れた士民に国防の意気を鍛えることに努めた。その一環として斉昭は武芸鍛錬を目的とした狩猟である追鳥狩（おいとりがり）を９回にわたって実施した。第１回は天保 11 年（1840）３月にこの地で実施された。斉昭自らが陣頭に立ち，騎馬 3,000，雑兵約 20,000 を城中に集め隊伍整然，千束原まで行軍するという大規模なもので，見物人も多く出たという。その時の斉昭の本陣跡に元治元年（1864）村民が小祠を立てて斉昭を祀った。この社は明治になって常磐神社と称され今に至っている。

千束原追鳥狩本陣跡

大串貝塚（史跡）

大串貝塚は，那珂川と涸沼川の合流点に向かって張り出した大串台地の先端部に位置する。貝塚は，シジミを主体としたもので，台地上（市立常澄中学校敷地内）の地点，東側傾斜地下端部の地点，北側斜面の地点にある。各地点とも発掘調査が行われており，いずれも茨城県域では珍しい縄文時代前期前半に形成された貝塚である。この貝塚の存在は『常陸国風土記』において描かれており，記録された先史時代の貝塚遺跡としては，世界最古のものとして注目さる。現在北側斜面地の貝殻や土器が広く散布する区域が国指定史跡となっている。

大串貝塚

大串遺跡

大串貝塚西方の台地平坦面に立地する古代官衙遺跡である。平成 19 年に行われた発掘調査で，複数の方形版築基壇をもつ礎石建物跡とそれを区画する薬研状断面の大きな区画溝が発見された。これらの遺構は，出土遺物と遺構の形態から８世紀から９世紀にかけての古代官衙遺跡であることが判明した。当該遺跡は，郡衙正倉院別院かもしくは『常陸国風土記』に記載のある「平津駅」に付属する一大倉庫群であると推定され，国指定史跡に匹敵する内容と

大串遺跡第７地点の調査風景

規模をもつものであることが明らかとなった。この遺跡の主要部と考えられる地点は，現在でも畑地としての土地利用のみがなされており，当該埋蔵文化財は，良好な形で遺存している。またこの周辺では，後述の台渡里廃寺跡とその周辺遺跡に匹敵する官衙関連遺跡が密集しており，本市域には，古代の政治的中心地がふたつあったことを示す。

『常陸国風土記』には，巨人が海まで手を延ばして貝を食した痕跡であるとの記述があり，これは直接的には大串貝塚を示す。世界最古の先史時代貝塚の記録として注目される。他方で，この巨人伝説は，歴史地理学的な見地から検討すれば，古代道路の巨大さを示す伝承として伝わる例が多いことから，当該遺跡が交通の要衝地で，実際に古代道路が通っていた可能性が高いことを示す。このように『風土記』にみえる巨人伝説は，先史時代貝塚と古代交通の要衝地とが相まった景観が叙述されており，現在もなお，涸沼と那珂川，涸沼川とに挟まれた農村景観が広がり，こうした古代人のみた景観の名残をとどめている。

台渡里廃寺跡（史跡）

台渡里廃寺跡は３地区に分かれており，北から長者山地区，観音堂山地区，南方地区と呼称される。大規模な礎石建物跡と多量の古代瓦が確認されていたことから，従来から様々な憶測があったが，近年の積極的な範囲確認調査の推進により，長者山地区が常陸国那賀郡衙正倉院，観音堂山地区及び南方地区が寺院伽藍であることが判明した。とくに観音堂山地区は７世紀後葉に創建された寺院であり，これが９世紀の前葉頃に何らかの事情で廃絶した後，南方地区に新たな寺院伽藍が計画されたが，造営途中で廃絶していたことが明らかとなったのである。また出土文字資料によって当該寺院が「仲寺（那賀寺）」あるいは「徳輪寺」と呼ばれていたことが明らかとなっている。

台渡里廃寺跡観音堂山地区の礎石列

那賀郡衙政庁の具体的位置は明らかではないけれど，周辺の台渡里遺跡，渡里町遺跡，堀遺跡では，近年著しい発掘調査成果の蓄積があり，周囲に官衙施設とそれに関連した計画村落が広がるという一大古代都市の様相を呈していることが明らかとなった。

『常陸国風土記』には，「郡より東北のかた，粟河を挟みて駅家を置く」との記載があり，実際に台渡里廃寺跡から那珂川を挟んで北東方向に中河内町の地名が遺る。対岸には田谷廃寺跡，白石遺跡などがあり，これまでの調査成果から，これらもまたやはり官衙遺跡である。那珂川を挟んで構成されるこれら官衙遺跡群のなかに河内駅家が設置されていることから，古代交通の結節点であり古代の政治・経済・宗教の拠点として栄えていたことがわかる。なお長者山地区及び長者山城跡一帯に伝わる駅長であった一盛長者が，奥州征伐に向かった八幡太郎義家に煮豆を振る舞った伝承は，こうした駅家を伴う官衙遺跡で，かつ関東から東北へ向かう際の交通の結節点であることと，水戸の名産である納豆の由来が混同して形成され

た伝説であると考えられるが，当該地域が政治・経済・宗教の拠点であり，交通の結節点であったことの裏付けを今に伝える伝説といえる。

長者山城跡

戦国期においてもなお，交通上の利便性と，那珂川沿岸の低地帯を高く望む特異な地形から，中世城館として，政治拠点のひとつとなった。それが長者山城である。築城年代や城主についての詳細な記録は遺っておらず，未だ不明な点を残すが，現在でも風致地区内に大規模な土塁と堀をよく遺し，台渡里廃寺跡及びその周辺遺跡における発掘調査によっても，同時期の関連遺構が数多く確認されている。このように良好に遺存する大規模な土塁と堀の存在が，後世の人々にとって，一盛長者伝説と結びつける結果となった。当該地域の人々と歴史及び伝承を結びつける遺跡としてその重要性は高い。

長者山城跡下層の古代倉庫群

木葉下窯跡群（木葉下遺跡）

水戸市の西北端にある木葉下町三ヶ野周辺には，奈良時代の須恵器や瓦を焼いた窯跡があることが確認され，その基数は４０を超える。出土遺物のなかで特に注目されるのは，台渡里廃寺跡所用瓦の存在であろう。現在でも丘陵斜面地端では，多くの須恵器・瓦を採集することができ，良好な状況で現状保存されている窯跡が多い。

『常陸国風土記』にみられる晡時臥山の伝説では，須恵器を投げつけられた蛇神が神通力を失って，晡時臥山に止まるという記載がみられ，この伝説がこれら古代の生産遺跡に深く関わっていることは，これまでの文献史学・考古学分野の研究成果から明らかとなっているところである。

また窯跡群中には金山という地名が遺る。これは，中世後期佐竹時代の金山の跡を示し，現在でも採掘した坑道が遺っている。丘陵地の自然資源を活用した古代・中世の手工業生産の拠点であることは，この点からもうかがえる。なお同一丘陵上の全隈町地内には，現在森林公園があり，園内には自然環境活用センターなどがあり，里山の景観を保全しながら，市民の憩いの場として活用されている。

木葉下釜跡群の立地する丘陵地

有賀神社

貞観元年(859)に創建されたと伝わる有賀神社は，古くは，延喜式内社である藤内神社に由来すると伝えられ，他の神社との合併や末社との合祀などを経て，明治 15 年(1882)に現在の有賀神社と改称した。子供の夜泣き・かんの虫にご利益があるといわれ，虫きりの神様として周辺地域の信仰を集めている。また毎年 11 月 11 日には，御神体が大洗町の大洗磯前神社へ渡御する「磯渡御」が行われ，大洗磯前神社における「虫きり」神事では，例年多くの人出でにぎわう。茨城では，蛇をしばしば「ナガムシ」と呼称することがあり，蛇神信仰との深い関わりを示す神事として注目される。

有賀神社

牛伏古墳群

牛伏古墳群は，標高 55～63m の丘陵状台地先端付近の 300×200m の範囲を占め，前方後円墳６基，帆立貝形古墳１基，円墳９基で構成されており，ごく狭い範囲に多数の前方後円墳が集中する特異な古墳群である。また当該台地に面した低地帯に立地する舟塚古墳群とあわせて考えると，古墳時代前期から後期にかけて長期間にわたり墓域となったところとして注目される。また，牛伏は晡時臥(くれふし)の遺称地としてしばしば指摘された場所であり，当該地域に密集する古墳群との関係は，考古学・古代史の中で解明されるべき課題となろう。

牛伏４号墳の近景

なお牛伏古墳群は，合併前に内原町新総合計画に基づく「花，農，歴史，森」をテーマにした公園整備計画の一環で，円筒埴輪列と墳丘を復原した４号墳（前方後円墳）を中心として「くれふしの里古墳公園」として整備された。当該公園は，歴史をテーマにした公園として広く活用されており，未指定の埋蔵文化財であっても，広く地域住民に対して保存・活用している例として注目されるべきものである。

【人々の活動】

大串のささらばやし（国選択・県指定文化財）

大串稲荷神社の祭礼に，江戸時代中期ごろから氏子たちが年番を決め，無病息災・五穀豊穣等を願って「ささらばやし」を奉納したのが起源とされる。ささらは底なしの舞台の中で，竹竿の先に付けた獅子頭を操り舞わせる棒ささらである。獅子は，雄獅子，雌獅子，子獅子の三体からなり，囃方の大太鼓・小太鼓・鉦・笛・唄に合わせて獅子舞を演じる。内容は，はぐれ子獅子を親獅子が探し求める悲しい場面や，親子が巡り合って互いに喜び合う場面などがある。

大串のささらばやし

棒ささらは本県の水戸・石岡地区に集中し，他県には見られない民俗芸能で，全国的にも珍しい。

大野のみろくばやし（国選択・県指定文化財）

みろくの起源については，2 代藩主光圀が領内巡視の折，極楽橋の下で三体の人形を発見し，のち下大野の人の手に渡ったと伝えられている。大野のみろくばやしは，竹竿の先につけたみろく人形を，底なし舞台の中で操り舞わせる芸能である。

三体のうち，顔が青い人形が「鹿島さま」で扇と幣束を持つ。赤が「香取さま」で太鼓を抱え，黄色が「春日さま」でナンバンツツコを背負う。囃方の大太鼓・小太鼓・鉦・笛・唄に合わせ，みろく人形が滑稽に踊り，五穀豊穣を祈る。踊る様子は子供が駄々をこねるように見えることから，「大野の駄々みろく」とも呼ばれた。

大野のみろくばやし

大根むき花（市指定文化財）

水戸市元石川町に江戸時代から伝わるもので，一本の大根を材料に，一丁の包丁だけでボタン，キク，アヤメ，ツバキなどの花を実物そっくりに作り出す珍しい民芸である。結婚披露宴などの祝いの座敷に飾られ，現代まで伝えられてきた。この技術を習得するまでには，「水むき３年，花８年」と言われているように，かなりの修練が必要である。

大根むき花

田谷の棒術

関が原の合戦で奮戦した，槍の名人佐々木哲斉徳久によりあみだされたこの武術は，無比流兵杖術といい，５尺５寸の樫の棒を自由自在に操りながら威力を発揮する。古くは戦災や飢饉の祈りなどに，他国の野武士や盗賊の侵入を防ぐため，水戸藩が民衆自衛の武術として奨励し，発達してきたと言われている。

田谷町には天明３年(1783)に伝承され，代々受け継がれてきた。現在は，郷土の伝承文化として保存会により保存継承されている。

田谷の棒術

農人形

徳川斉昭が藩主となって発した第一声が「愛民専一」であったように，斉昭は大規模な農政改革に着手するとともに，農民に対して並々ならぬ関心を寄せた。農人形もその一つである。斉昭は国の基である農民が，度々の天災にも負けず，日夜汗と泥まみれに働く尊い姿に心うたれ，自ら青銅で作った農夫の像（農人形）を食事のたびに膳にのせ，最初の一箸のご飯を供えて農民の労に感謝したという。農人形は，水戸独自の農本主義から生まれた像で，全国にその例を見ないものである。

農人形

近代になって水戸の彫刻師がこの農人形を初めて木に彫り，水戸の代表的な民芸品の一つとなっている。

水戸押絵

押絵の技法が生まれたのは鎌倉時代で，世に広まったのは，江戸時代に大奥女中が手遊びとして，江戸城お抱え絵師の下絵をもとに端布を使い，浮世絵，山水花鳥の押絵をつくるのが流行して以来という。「水戸の押絵」も 100 年以上の歴史をもち，原画は日本画の線描き技法で厚紙に描き，これを布で包んで中に綿をつめることで，顔の表情や動作にメリハリをつけている。

水戸押絵

米粒人形

米粒人形は，常陸太田市の西山において高橋都山(とざん)が，昭和 20 年代に製作を始めたもので，２代藩主光圀が創建した久昌寺(きゅうしょうじ)の僧侶・日孝(にっこう)が，米粒に「南無妙法蓮華経」と書いて参拝者に配ったという故事に由来するものである。全国でも珍しい米粒人形は，製作開始直後から評判を呼んだ。初めは文字を書くことが多かったが，しだいに人形，動植物など絵柄も増えていった。現在は，高橋都山氏の弟子の岡崎ゆき子氏が製作を続けている。

米粒人形

涸沼竿

涸沼は海水と淡水が混じり合う汽水湖で，満潮時には海水が逆流し，富栄養湖でもある。そのため，ハゼ，ボラ，コイ，フナ，ウナギ，ワカサギ，ウグイなど 60 種類以上の魚が生息する釣りの名所である。涸沼竿は，これらの大小様々な魚を１種類だけの竿で狙うため，細くしなりのよい竹材を使用した独特の和竿である。材料にはホテイチク，ヤダケ，ハチク等が使われ，火入れをし，自然にしなる方向を見定める技が必要である。また涸沼竿は２本並べて使用することから，太さ，重さ，しなりが同等の竹を選ばなくてはならず，その伝統的な技術には極めて高いものがある。大正期に涸沼に船

涸沼竿

宿ができると関東一円から多くの釣り人が訪れ，この竿の名声を高めた。一時期この技術は衰退しつつあったが，和竿師川上東明氏によって復興された。

吉原殿中

第９代藩主斉昭のころ，御殿女中吉原が農人形に供えた御飯を乾飯にし，これを煎り，飴，黄な粉でまぶして作ったのが始まりといわれている。

なお，その他の水戸の銘菓としては，「水戸の梅」「梅ようかん」「のし梅」など偕楽園の梅にちなんだものが有名である。

吉原殿中

那珂川の鮭

本市を流れる那珂川は，かつて鮭の遡上する南限の川として知られ，ここで捕れた鮭は江戸時代に朝廷や幕府への献上鮭として珍重された。記録によれば，水戸藩では初鮭に報奨金を与え，江戸の将軍家に早馬で献上したという。

現在も秋になると産卵のため鮭が遡上する。市内の川魚店などで取り扱われており，その小ぶりで淡白な味わいが，筋子や白子とともに楽しめる。